研究余滴

水に浮かんだ話

狩野　雄

＊

想像することが難しい時代になっている。世界中の出来事が音声を伴った映像として届けられるとき、われわれの想像が入り込む余地はとめどなく小さくなっていく。それだけでもない、どこかでそのままを受け取ればよいと思っている（思わされている）のだ。この意味において、今の社会は、想像の翼を広げるのが本分である読書との親和性を失いつつあるのかも知れない。でも、だからこそ、想像を超えた面白さに出逢ったときは堪（たま）らない。解き放たれた心は快哉（かいさい）を叫ぶ。

――楽しいっ。

今夏、娘と琵琶湖に浮かんだ。一人乗りのカヤックに乗り込み、パドルを握って湖面を掻く娘に、大丈夫かと訊ねた問いへの答えである。解き放たれた心の言葉は至って単純だ。

よく晴れた暑い日だった。インストラクターのKさんに教えられた通り、パドルを肩幅より少し広めに握り、左右交互に漕げば、一応は進む。パドルが重いかと思えば、漕いだ以上に進んだりもする。水を進むといっても、プールで泳ぐのとは明らかに違う、普段とは異なる身体の感覚が楽しい。僕らは湖面、波の上にいるのだ。

パドルを操ることに多少慣れたところで、岸辺を離れ、大いなる水面に向って漕ぎ出した（といっても実にささやかであるが）。途端に風を強く感じるようになる。遮るものが何もない水の上、風は思うままに吹いている。

満面に笑みを浮かべた娘を見ながら、風をそのまま受

けるのをどこか落ち着かなく感じるのは、要らぬ計算が働くようになって心が弾力性を失ってきているせいかも知れないな、などと思いもしたが、その心も段々と解き放たれていった。ゆらぐ――水の上にいればこその感覚である。水を、やわらかく弱いが、堅く強い存在を攻めるのにこれほどすぐれたものはないと言ったのは老子であった。弱さが強さに、柔軟さが剛毅さにまさるのは、水の本質が動きの中にあるからだろう。水は堅くなった心も解きほぐす。上善水の若し。(1)

琵琶湖は広い。そして、見上げた空も果てしなく広い。あぁ、空とはかくも広いものであったか。娘と一緒に空に向かって、文字の成り立ち通りに歓びの声を放つ。水面に映った陽光は音を立てんばかりにきらめいていた。

「歓」や「歎」の旁である「欠」の日本漢字音は「ケン」である。(2)その篆体は「」で、後漢・許慎の『説文解字』を紐解くと、口を大きく開けて声を出すことだと説かれている。

欠、口を張りて气悟つなり。气の、儿の上从り出づるの形に象る。（欠、張口气悟也。象气从儿上出之形。）〔説文解字注　八篇下　欠部〕

今、「なげく」の漢字に「嘆」を用いることが多いが、「欠」を意符（形符）に持つ「歎」の字義も基本的には同じである。これらは安寧なる日常を離れたところに生じた強い感情を表しているが、そもそも「あぁ」に色がないように、「讃嘆（歎）」か「悲嘆（歎）」か、はたまた「感嘆（歎）」か、「嘆（歎）」をどう読むかは文脈によって決まる。八月上旬の琵琶湖で発せられた父娘の「あぁ」は、もちろん明るく快い感情の表出であった。

＊＊

舳先の向きを変えて葦の群生する岸辺に向った。

――なんだかヤービみたいだね。

――あぁ、そうだねぇ。

三年生の冬休みを挟んで読んでいた『岸辺のヤービ』にこんな場面がある。

その日は、ボート漕ぎにはまたとない日でした。お日さまがやる気を出しすぎて雲をぜんぶおっぱらってしまったかんかん照りのようでもなく、気まぐれな積雲がふと思い立って急激に大きな入道雲に変身してどしゃぶりの雨を降らす、というようなこ

ともない、おだやかなうす曇りの日でした。こういう日って、ありそうであまりないものです。（中略）

風がざざっと、灯心草の穂を不規則にゆらし、池の面を細かく波立たせ、去っていきました。小さな三角形のきらきらが、無数に生まれては消えていきました。

わたしは本を十ページほど読み進んだところでした。そのきらきらに気づき、しばらく見とれ、それから顔を上げ、太陽は少しかたむいたようだな、と思い、ミルクキャンディーをひとつ取り出して包み紙を開きました。

〔梨木香歩『岸辺のヤービ』（福音館、二〇一五年）十五頁〕

この後、語り手である「わたし」は、「カヤネズミほどの大きさで、一見したところ、直立二足歩行するハリネズミのようにも見え」る「ヤービ」と再会し、初めて言葉を交わすことになる。

――ヨシのグンセイしているあたりは、秋になるともっと奥へ行けるんだって。

Kさんが言ったのをそのまま伝えてくる。葦は落ちたばかりの羽子のように、湖面から突き出すように生えており、青々とした生命力とも相俟って、湖水の岸辺に凹凸のアクセントをつけている。秋になれば、今見えているところから、もっと奥へ漕ぎ入ることができるというのだ。ヤービの物語の岸辺の風景が浮かんでくる。

娘と僕は、小さな生き物ヤービと出逢って物語を紡いだ「わたし」と目線の高さを同じくしていた。深く繁った葦の群落の奥にヤービがいることは間違いない。そう想えば胸が躍り、思わず声が出る。

想像することが難しいほどに、想像が入り込む余地がとめどなく小さくなっているほどに世界中の出来事が音声を伴った映像として届けられる時代になっているとしても、そこに充ちる空気だけは届けることができない。その日その場所に身一つを置いて、思いきり深呼吸をするように再現することまではできない。あの日、よく晴れた夏のあの日、琵琶湖の上に浮かび、湖水を掻いた身体の記憶は、他の誰でもなく、われわれ父娘のものだ。そうしてこれはきっと他者の表現を受け取るよすがとなるはずのものである。想像とは自己の身体の記憶を他者のそれに重ねる謂いでもあるのだから。あの突き抜けるようにワクワクする爽快感を何に重ねることができるだろう。

＊＊＊

杜甫に「卜居（居を卜す）」という詩がある。この詩が詠まれたとき、詩人は四十九歳、四川は成都の郊外にいて、土地を求めて庵を結ぼうとしていた。後世のいわゆる杜甫草堂である。

卜居　　居を卜す　　杜甫

浣花溪水水西頭　　浣花渓水 水の西頭
主人爲卜林塘幽　　主人為に卜す 林塘の幽なるを
已知出郭少塵事　　已に知る 郭を出ずれば塵事少なきを
更有澄江銷客愁　　更に澄江の客愁を銷す有り
無數蜻蜓齊上下　　無数の蜻蜓は斉しく上下し
一雙鸂鶒對沈浮　　一双の鸂鶒は対いて沈浮す
東行萬里堪乘興　　東行万里 興に乗ずるに堪えたり
須向山陰入小舟　　須く山陰に向かいて小舟に入るべし

〔杜詩詳注巻九〕(3)

杜甫の詩を、その人生から切り離して読むことは難しい。しかし、これを作品としての自由度・自立性が低いためだと考えるのは正しくない。自らの人生にしっかりと根を張ることにより、他者の人生にも寄り添い得るものとして杜甫の詩は存在している。

初句の「浣花溪」は成都の西を流れる川の名で、「錦江」などとも呼ばれる。第二句の「主人」は杜甫自身、「林塘」は木々と池である。「居を卜す」と題されるように、自分がここに住むことの吉凶を自ら占ったわけだが、「已に知る 郭を出づれば塵事少なきを」、そこが世俗の事どもから解放される良さを具えていると思ったから占うことにしたのである。他に選択肢がなかったのだとも言えるが、そんな予想（あるいは希望）が詩人の脳裡にはあったのであろう。ところがその予想は裏切られる。

更に澄江の客愁を銷す有り

城郭を出たなら、俗塵に塗れることも少なくなるだろうとは思っていたが、清らかに澄んだ川の美しさに根無し草の愁いが解けてゆく——。安史の乱はいまだ終息せず、自らの流浪もまた終わりを見出すことができない情況下にありながら、予想を超えた眼前の景色に心を奪われたことを詠んでいるのである。あぁ、なのか、おぉ、なのかは知らないが、杜甫の口から感歎の声が漏れただろうことは想像に難くない。

詩人の筆はこうしてまず全体として在る清新な美しさを捉え、ついで川面の生物の全きありかたを写す。

無数の蜻蜓は斉しく上下し
一双の鸂鶒は対いて沈浮す

数えきれないほどのトンボが揃って川面を上流へ向かって飛んでいったり下ってきたりし、ひとつがいのオシドリが向かい合うようにして浮かんだり沈んだりしている。

ありふれてささやかな、しかし、有り難く斉全なる（あるべき物が揃っている）世界。かかる景色に心を傾けながら、杜甫の脳裡にはある着想が浮かんできたようだ。『世説新語』任誕篇に見える逸話[4]を踏まえてこの詩を結ぶというものである。

東晋の王徽之（字は子猷）が山陰（浙江省会稽山の北）にいたとき、雪の夜ふと剡溪にいる戴逵（字は安道）に会いたくなり、舟に乗って訪ねて行ったが、門前まで来たところで引き返した。訳を訊ねられた王徽之は、「興に乗ったので行き、興が尽きたので帰っただけだ」と答えた、という。尾聯はこれを踏まえている。

東行万里 興に乗ずるに堪えたり
須く山陰に向かいて小舟に入るべし

杜甫は眼前の景色の美しさに、ここで暮らすことの受動的な意味だけでなく、能動的な積極的な意味をも見出した。面白がれる心の持ち主としての杜甫が立ち上がってくる。実際、「卜居」以降、草堂の庭に植える樹木や室内で愛でる品々を揃えていくことを詠じた詩群には、もちろんそれほど単純平板なものであろうはずはないが、比較的穏やかな時間を送ることができたとされる成都時期のものだけあって、ある種の明るさが見て取れる。琵琶湖でカヌー（カヤック）に乗ってみたいかと訊ねた僕に、娘はその経験のないままに目を輝かせながら、やってみたいと即答したのだった。面白がれる心に清新な何かはやってくる。

この詩の末句で杜甫が乗り込むべしと詠じたのは「小舟」であった。「小舟」としたのは、典故の『世説新語』に「乗小船」とあることに拠るのであろうし、現況における自らの小ささともよく釣り合うと考えたのかも知れない。その一方で、ここに「舟」が用いられているのは、たとえそれが「小」さなものであっても、なかなかに象徴的である。「舟」の字義を『説文解字』は次のように説いている。

舟は、船なり。古者共鼓・貨狄 木を刳りて舟を為り、木を剡りて楫を為り、以て通ぜざるを済る。象形。（舟、船也。古者共鼓貨狄刳木爲舟、剡木爲楫、

以濟不通。象形。〕〔説文解字注　八篇下　舟部〕

その昔、人は木を刳って舟を、削って楫を作り、川を渡ったというが、「以て通ぜざるを済る」という記述は、そうしなければ渡ることができなかったことを想わせる。われわれにとって、水は命であるが、しばしば障壁となる。川がこちらとあちら世界の境目となっていたことは民俗学的知見の教えるところであるが、中国にあっては河川に照準しながら記される地理書の存在が川の有する境界性を雄弁に物語っている(5)。杜甫にとっての障壁＝境界は現下の情況そのものであった。それでも「舟」があれば、興に乗じて万里の彼方へ行ける、行けそうな気がしてくるというのである。杜甫自身が楫を取り小舟を操ってということではないだろうが(6)、このとき小舟と杜甫は一体となっている。

＊＊＊＊

片方だけを漕ぎ続けると旋回するという理屈は誰でも乗る前から知っているが、左右のリズム・バランスが動きの中にしかないことは乗ってみてはじめて実感するものである。

――湖の中をのぞこうとしたら、落ちそうになったの。

魚影に心を取られた娘が報告してくる。なるほど、李白も川に落ちるわけだ(7)。深さもさまざまな湖水は多くの魚を生かしている。浅瀬で小舟を降りて湖に入り、後部を抱えてバタ足をしてみると、ちょっと魚になったような気がする。そうしてやっぱり琵琶湖は広い。Kさんが訊いた。

――今見えているのは琵琶湖全体のどれくらいだと思いますか。

――五分の一。

少し考えてから娘が答える。

――実は十二分の一なんです。琵琶湖は広いんですよ。

誇らしげにKさんが言う。これを時間に当てはめてみれば、われわれは今、一年のひと月分しか捉えていない計算になる。あるひと月を以てその年を語ることはなかなかできるものではない。ことほどさように琵琶湖は広い。

パドルを左右平衡に漕げるようになってきたのか、思ったよりも進む。そうかと思えば、流されてもいるようだ。自分自身が帆になっているのか、岸辺に沿って水が流れているのか。迷う感じも含めて、これが水面に浮

かぶということなのだと改めて思う。中庸を求めていきながら世界の大きさも実感するようにとでも言ったらよいだろうか。来年また来ようと約束して湖畔を後にした。きっと、同じで、全く違う景色を見せてくれることだろう。

＊＊＊＊＊

十月末に振り返るのはいささか気忙しいが、敢えて振り返ってみれば、今年は注釈の年であったと言えそうだ。

かつて吉川忠夫氏は「注釈を読むことは実にたのしい仕事である。[8]」と書かれた。これは経書や史書の注釈についてのことであるが、注釈を「たんに手段としてのみ存在するのではない。注釈者が原典をどのように読んだのか、そこになにを読みとったのか、あるいはなにを仮託したのか、つまりそれは注釈者と原典作者とのかかわりあいを示す記録としても存在する」ものとして読み得るのは、今日の注釈においても同様であろう。

個人的に注釈の年であったという今年は、以前参加していた研究会で積み上げられた成果が、二月に『『隋書』音楽志訳注[9]』として上梓されたことがまずあり、次いで杜甫の生誕千三百年を記念して立ち上がったプロジェクトが、六月から十月にかけて『杜甫全詩訳注[10]』として結実し、最後はこの十月、学会のシンポジウムのパネルディスカッションで陸機の「贈潘尼」という詩を取り上げ、先行する注釈を並べながら発表する機会[11]が与えられたのであった。

いずれも末席に列なったに過ぎないが、水に浮かぶのと同様、参加してはじめて見えてきたことは実に多い。中心となって多くの労をとられた方々に感謝したいと思う。数年に亘るこれらの営みが一つの実りとなる過程においても、自ずと「注釈」という語に向き合い、考えることとなった。

ところで、いま「注釈」の「注」を「註」とも書くが、本来は紛れもなくさんずいであった。「註」はもともと「記す」意味にのみ用いられ、「注釈（＝とく）」の意としてはずいぶん遅れて明代になってから用いられるようになったのである。[12]「注」の「水」を「言」に差し替えるわけであるからいかにも理屈が勝った字で、いくらか衒いも感じないではない。本来がそうであるということとともに、注ぎ入れるという行為の意味を忘れないためにも、「注」と書きたい。

今年もそろそろ筆を執らなくてはならない。パドルを筆に持ち替えて、拙い字をものせねばならない。その前には硯にわずかな水を注いで墨を磨るわけだが、今年はそこに小舟でも浮かべてみることにしよう。もしかしたら書ける気がしてくるかも知れない。

あの空の下、あの水の上に咲いた、娘のあの楽しそうな顔を、これから先もずっと忘れることがないだろう。草堂を結ぼうとする地の景色に見惚れた杜甫の喜びはもっと複雑なものであったに違いないが、それでも、そこにもいくばくかの無邪気さを見出したいように思う。

【注】

（1）『老子』の「水」に関する言葉には深くうなずかされる。

上善若水。水善利萬物而不爭、處衆人之所惡、故幾於道。……〔老子道徳経　第八章〕

天下莫柔弱於水、而攻堅強者莫之能勝、以其無以易之。弱之勝強、柔之勝剛、天下莫不知、莫能行。……〔老子道徳経　第七十八章〕

（2）欠伸は「ケンシン」であり、「欠」の字を「ケツ」と読むのは、不足するという引申義から「缺（けつ）」の代用字として使われるようになってからのことである。

（3）訓読・解釈は、『杜甫全詩訳注（二）』0385（講談社学術文庫、二〇一六年）に拠る。

（4）王子猷居山陰、夜大雪、眠覺、開室、命酌酒。四望皎然、因起仿徨、詠左思招隱詩。忽憶戴安道。時戴在剡、即便夜乘小船就之。經宿方至、造門不前而返。人問其故、王曰、「吾本乘興而行、興盡而返、何必見戴」。〔世説新語　任誕〕

（5）北魏の酈道元（れきどうげん）が注を施すかたちで著した『水経注（すいけいちゅう）』四十巻は、河川を中心に据えながら当時の中国全土の地理を詳細に記述した書である。

（6）杜詩中に「舟・船」を含む句は少なくなく、「煙花山際重、舟楫浪前輕」（「泛江送客」）、「漁人縈小楫、容易拔船頭」（「江漲」）など、「楫」を操る様子詠じた表現も多く精彩に富む。

（7）李白の死については諸説あるが、その一つが、川面に映った月を掬おうとして船から水中に落ちて死んだという捉月説話である。

（8）『正史三国志2』（ちくま学芸文庫）「解説――裴松之のこと」。のち、『読書雑志』（岩波書店、二〇一〇年）所収。

（9）六朝楽府の会『『隋書』音楽志訳注』（和泉書院、二〇一六年二月）

（10）『杜甫全詩訳注（一）』（下定雅弘・松原明編、講談社学術文庫、二〇一六年六月）、『同（二）』（七月）、『同（三）』（九月）、『同（四）』（十月）。

（11）日本中国学会第六十四回大会（於奈良女子大学、十月八日・九日）、次世代シンポジウム・パネルディスカッション「中国古典詩における精読（クロース・リーディング）の探求」。

（12）注釈の意味での「註」字使用について、清の段玉裁は「大いに古義に非ざるなり」と批判する。

　按漢・唐・宋人經注之字無有作註者、明人始改注爲註、大非古義也。古惟註記字從言、如左傳敘諸所記註、韓愈文市井貨錢註記之類。通俗文云、記物曰註。廣雅、註、識也。古起居註用此字、與注釋字別。

〔説文解字注　十一篇上二　水部　「注」段注〕

（本学教授）